

新書の体裁と原稿執筆上の留意点

【体 裁】

判型 新書版（105 mm×173 mm）
ページ構成 1 ページ 15/16 行，1 行 39～42 文字
ページ数 刷り上がり 200 ページ前後

【原稿執筆上の注意】

原稿文字数 100,000～120,000 字（400 字詰め原稿用紙 250～300 枚）程度
文体 ですます体，である体，いずれも可
注 使わないことを基本としつつ，読者の理解を助けるのに必要な場合は使用可
章節構成 分野や内容に応じて適切な構成とする．例えば，

I	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
II	○○○○
1	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
2	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
3	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
III	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□

1	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
2	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
3	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□

第一章	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
第二章	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
第三章	○○○○
一	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
二	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□

第 1 章	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
第 2 章	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
第 3 章	○○○○
1	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□
2	○○○○
	□□□□□□□□/□□□□□□□□/□□□□□□□□

適宜，目次の前に，「まえがき」，「はしがき」等

適宜，末尾に「あとがき」，「おわりに」等，また，「索引」，「参考文献」等

想定する読者 大学生，知的好奇心をもつ一般社会人（たとえば，市民公開講座の受講者層）
— 『「しまふくろう新書」の創刊に寄せて』を参照

「しまふくろう新書」の創刊に寄せて

皆さまご承知のように、教職員各位の賛同を得て、今年度より本学に北海学園大学出版会（Hokkai-Gakuen University Press、略称 HGU Press）が設立されました。出版助成を受けたその第一号の刊行物として、F・W・グラフ『真理の多形性—来日講演集』が三月下旬に刊行される運びとなっていますが、出版会としては本格的な学術書のほかに、次年度から教養書ないし啓蒙書としての新書の刊行も視野に入れています。

出版会の母体である北海学園大学は、経済・経営・法・人文・工学部の五つの学部からなる総合大学です。しかし総合大学が真の意味で総合大学であるためには、文系と理系の学部が単に複数設置されているというだけでは不十分です。それらの専門的に激しく分化した異なる学部・学科の根底に、共通の知的・学問的基盤が横たわっていて、大学全体の知的活動を統合する役目を果たす必要があります。

大綱化以前のわが国の大学には、教養部あるいは教養課程というものがあって、専門課程で何を学ぶにせよ、その前段階に一般教養的科目が置かれていました。専門課程は「狭く・深く」掘り下げること目指しますが、その前段階にまたその前提として、「広く・浅く」学ぶりベラル・アーツの学びの重要性は、今日各方面で再認識されています。けれども、リベラル・アーツ教育を専門教育にどう結びつけるかは、非常に困難な課題です。大学の機構や学制の大幅な改革を伴わざるをえないとなると尚更です。

しかし現状においてできることがあります。例えば、各学部に属するそれぞれ異なった専門研究に従事する教員が、自分の専門研究の成果の一端を、学部学生（他学部学生を含む）や他の教員に向けて、さらには一般読者に向けて、わかり易く解説して示す教養書・啓蒙書があれば、蝸壺的な知の陥穽や近視眼的な弊害は、ある程度回避できると思います。

わたしはそのように考えて、本学における総合知を醸成するための一助として、北海学園大学独自の「学園新書」の創刊を提案してきました。しかしこの名称では道外の人には通じないので、ここに新たに「しまふくろう新書」という名称を提案いたします。

ご存知のように、しまふくろうは、北海道のなかでも手つかずの自然が残っている場所にしか生息しない、稀少な天然記念物です。その表情には思慮深い哲人を思わせる威厳があります。古来アイヌの人たちは、この鳥をコタン・コロ・カムイ（村の守護神）と呼んで神聖視してきました。ふくろうは、一般的に、「知恵」「学問」を象徴しています。哲学者のヘーゲルが、「ミネルヴァのふくろうは、日の暮れ始めた夕暮れとともに、はじめてその飛翔を始める」と述べたことで有名な、古代アテネの「ミネルヴァのふくろう」はその代表格です。わたしはこれらの事例にあやかって、本学で創刊する新書に「しまふくろう新書」と命名してはどうかと考えた次第です。

学長 安酸敏眞
令和2年1月31日